世界宣教への道を拓く
迫害者サウロの選び

使徒言行録9章1～19a 節
2022年6月12日
松田 基子 師

先週は聖霊降臨日でした。 神様の人類救済計画は、神の御子イエス・キリストによる、人類の**罪を贖う十字架の死**によって、人類への**救いの道が拓かれ**ました。 神様の**次の御計画**は、このイエス・キリストによる**救いを**、全**世界に伝え**ることでした。 その務めは先ずイエス様を信じる、弟子達に委ねられましたが、それは人間の説得力や力で出来るものではありません。 神様は心を合わせて**祈る弟子達の共同体**に、天地創造の初めから、三位一体で働いてこられた**聖霊を**、イエス様と入れ替わりに、この地上に**送られ**ました。

聖霊は弟子達の心に内住して、彼らを人々に向かって、

『十字架に架けられた**イエス様こそ**、神様が遣わされたメシア、**真の救い主**です。 罪を悔い改め、**このお方を信じ**て**救われなさい**』

と大胆に語る者とされました。 **聖霊**は、弟子達に**内住**し、語る**勇気**、語る**言葉**を教えて、不思議な**業**を現し、

『イエス・キリストこそ
真のメシア、救い主である』

ことを実証して助けられました。

使徒言行録6章7節を見ますと、

「**こうして神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った**」

とあります。 イエス様の十字架は、紀元30年とされていますが、 教会がその様に働きを進めていた紀元３６年頃、エルサレム教会には、ステファノという、ギリシャ文化の中で育って、ギリシャ語を話すリーダーがいました。 使徒言行録6章8節には、

「**ステファノは恵と力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた**」

とあります。

そのステファノに、外国出身の一つのグループが、議論を仕掛けて来たのですが、ステファノが知恵と霊によって語るので、彼らは歯が立ちませんでした。 彼らはそこで、民衆を唆し、宗教指導者達を扇動して、ステファノを捕らえて、最高法院で裁判に懸けました。 ステファノは、イスラエルがその歴史全体に渡って、頑なで神様への反抗を繰り返して来た事を、具体的な歴史を通して説明しました。

神様の働きは今や神殿ではないと言って、使徒言行録7章51節から

「**かたくなで心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。**」
「**あなたがたの先祖が、迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。**」
「**そして今や、あなた方がその方を裏切る者、殺す者となった。 天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした**」

と言って彼らの罪に気付かせ、

「**正しい方、真の救い主、メシアは、ナザレのイエス様である**」

事を認めさせようとしましたが、人々は自分の罪を認めようとはせず、反ってステファノを都の外へ引きずり出して、石打の刑を科したのでした。

その時、

『こんな事を言う者を生かしておいてはならない』

と考え、ステファノの殺害に賛成し、人々の上着の番をしていた青年がいました。 彼の名は、サウロと言い、彼の家は、代々キリキア州の州都タルソスで、名を挙げた家でした。 余程の功績がなければ与えられない、ローマの市民権を持った名家でした。 彼はタルソスに生まれ、タルソスは哲学が盛んな町でしたから、哲学を始め、ギリシャ語による、様々な学問を学びました。 しかし、一方で父親は、厳格なファリサイ派に属する信仰者であった事から、青年時代はエルサレムに行って律法の高名な指導者ガマリエルの許で、律法を学びました。

イエス様が十字架に架かられた頃は、ラビとなって、タルソスに帰っていたであろうと言われています。 彼が再びエルサレムに来た時期は分かりませんが、宗教指導者達と共に、教会の

働きを危険視していました。 そのサウロがステファノの説教から、危険を感じたのは、
『神殿が否定され、あなた方は
律法を守らなかった』
と否定された事です。 これは国を揺るがす教えだと、鋭く感じました。 そうしてステファノの殺害を見守っていると、彼は思いも掛けない光景を目にしたのです。

ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、
「**天が開いて、人の子が神の右に
立っておられるのが見える**」
と言い、投石を受けながら、
「**主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい**」
と叫んで、召されて行ったのです。
一方人々の怒りは、ステファノ殺害だけでは治まりませんでした。 エルサレムの教会に対して、大迫害が起こりました。 サウロもまた、怒りに燃えて、教会を荒らし、男女を問わず引き出して、牢に送ったのでした。

サウロは自分自身についてフィリピの信徒への手紙、3章6節で、言っている通り、
「**律法の義については
非のうちどころのない者だ**」
との自負がありました、自分はそのために、どれだけ努力して来た事でしょう。
『こうして神様に仕えているのだ、
神殿と律法こそがイスラエルの使命である』
と思い込んでいるサウロは、
『自分の人生を壊されてなるものか』
と、エルサレムの教会を潰すだけでは気持が治まらず、外国へ逃れて行った信者をも、捕らえに行くことを思い立ったのです。
使徒言行録9章1節を見ますと、
「**さて、サウロはなおも、主の弟子たちを
脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司の所へ
行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。
それは、この道に従う者を見つけ出したら、
男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行
するためであった**」
とあります。

彼は数人の同行者と共に、ダマスコに向かいました。 ダマスコはイスラエルの北方にあり、軍事上、商業上、最も重要な道路が交差する要衝でした。 そこには数多くのユダヤ人が住んでおり、家の教会がいくつかありました。 ところで、サウロの一行がダマスコに近づいた時、突然天からの光が、サウロの周りを照らしました。
サウロは、目を開けて居る事が出来ないで、目を閉じて、地に倒れました。 次の瞬間サウロは天から語り掛ける声を聞きました。
「**サウル、サウル、なぜ、わたしを
迫害するのか**」
との言葉です。

サウルという呼び方は、ヘブライ語の、
『シャウール』
を訳したものです。 サウロはそのシャウールをギリシャ語化したものです。 ちなみに、
『パウロ』
はラテン語で、ローマ風の呼び方です。 その意味は、
『ヤハウェ(主)に求める』
と言う意味です。

サウロは地に倒れ伏すほどの強い光を受け、天から自分の名前を呼ばれたことに驚き、
「**主よ、あなたはどなたですか**」
と尋ねました。 すると、
「**わたしは、あなたが迫害している
イエスである**」
との答えが返って来ました。 自分は今まで、
『イエスという名前を滅ぼすために教会を
迫害して来た者です。 自分は神様のため
に一生懸命に尽くしている』
と思い込んでいました。 しかし、そこにあったものは、
『自分が、人生で築いて来たものが、壊され
ようとする事に対する怒りと憎しみでした。』
それに引き替え、あのステファノの死は、
『自分を殺害する者のために、執り成し
をして、天を見上げ、輝いていました。』
ステファノは、確かに
「**天が開いて、人の子が神の右に
立っておられるのが見える**」
と言いました。

天から、
『自分の名を呼ぶこの人は、
そのお方に違いない。』
そのお方が、
「**わたしはイエスである**」
と宣言されたのです。
『あの十字架に架かったナザレの

イエスは、神の右の座に居られる』
『神が定められた真のメシア、
救い主だったのだ』
と、サウロははっきりと分かりました。
『そのイエス様を信じる人々を迫害して
きた事は何より、イエス様を迫害してきた
ことである』
と、サウロには良く分かりました。

イエス様は続けて、6節に、
「**起きて町に入れ。 そうすれば、
あなたがなすべきことが知らされる**」
と言われました。 同行して来た人たちは、この状況に、ものも言えず、ただ呆然と立っていました。 サウロは地面から起き上がって目を明けたのですが、何も見えませんでした。 彼の心も真っ暗でした。 彼は手を引いてもらって、ダマスコの町に入って行きましたが、三日間目が見えず、食べることも、飲むこともしませんでした。

三と言う数字は聖書では完全数です。 この時何が完全だったのでしょうか。 パウロは、自分が神様に逆らう者であったことが分かり、その罪に対する罪責感は、彼を打ちのめしました。
『聖なる者たちを迫害して来た』
のです。 それは悔やんでも悔やみ切れません。物を食べることも、飲むことも出来ないでいました。 神様に心から悔い改めたのです。 完全な悔い改めでした。

一方、イエス様はサウロを教会の交わりに入れるために、働きを始めておられました。
10節を見ますと、
「**ダマスコにアナニアと言う弟子がいた**」
とあります。 ダマスコには、既にイエス様を信じる人たちがいて、家の教会を形成していました。アナニアはエルサレムの迫害から逃れて来たと言うのではなく、元からダマスコに住んでいたユダヤ人で、既にイエス様を信じていて、教会の良きリーダーでした。

アナニアが祈っていると、イエス様は幻の中で、10節に、
「**アナニアよ**」
と呼び掛けられました。 アナニアが、
「**主よ、ここに居ります**」
と応えますと、9章11節で、
「**主は言われた。
『立って直線通りへ行き、ユダの家にいる
サウロと言う名の、タルソス出身の者を訪ね
よ。 今、彼は祈っている。 アナニアと言う
人が入ってきて、自分の上に手を置き、元
どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻
で見たのだ』**」
とあります。 アナニアはサウロと言う名を聞いて驚きました。 それはアナニアが最も恐れる嫌な名前です。 13節を見ますと、アナニアは勇気をだしてイエス様に、
「**主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あ
なたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働
いたか、大勢の人から聞きました。 ここでも、
御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、
祭司長たちから、権限を受けています**」
と訴えました。

アナニアは、サウロが何を目的に、ダマスコに来たのか、良く知っていました。 自分も捕らえられて、エルサレムに連行される可能性は大いにあります。 その人の所に、自分から行くなんて、捕まりに行くようなものです。 アナニアにはサウロの身に、何が起こっていたのか、まだ分かりませんでした。 でも、イエス様は、
「**今、彼は祈っている**」
と言われました。 祈り、それは
『神様に真剣に向かい自分を正す』
ものです。
『神様の前に正される』
『神様が取り扱われる』
『神様の支配に身を置いている』
時です。
『自分がイエス様の命令に従ってサウロの
所に行かなければ、サウロはイエス様の
真実に出会えない』
のです。

あれこれ考え躊躇しているアナニアに、
イエス様は15節で、
「**行け。 あの者は、異邦人や王たち、また
イスラエルの子らにわたしの名を伝えるため
に、わたしが選んだ器である。 わたしの名の
ためにどんなに苦しまなくてはならないかを、
わたしは彼に示そう**」
と言われました。 イエス様はサウロを見込んでおられます。 イエス様は、彼が心から、神様に従おうと、真剣に生きて来た事を一番良くご存知でした。 真剣に律法を学び、神様に従う事

を、一生懸命に求めて来たサウロでした。 ただ、それは彼の努力で築いてきた道でした。 しかし、彼が悔い改めた今、聖霊によって、上からの啓示を受けたなら、彼は、

『聖書は、何を示して来たのか、神様はイスラエルを通して、歴史をどう導こうとしておられるのかがはっきりと分かり、培ってきた彼の能力の全てを使って、一般の人から王に至るまで、イスラエル人から、異邦人まで、全ての人に、イエス・キリストこそ真の救い主である事を宣べ伝える器になれる筈です。』

アナニアには不安がありましたが、イエス様の、

「**行け、**」

との命令に、

『イエス様が共に行って下さる』

との確信から、勇気を出して、示された家に向かいました。

アナニアは、初めてサウロに会いました。 彼は真剣に祈っていました。 祈るサウロの姿に、最早、恐れる必要はありませんでした。 それどころか、イエス様を信じ合えると言う、親しみが生まれて来ました。 アナニアは、

9章17節で、サウロの上に手を置いて、

「**兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どうり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです**」

と言いました。

アナニアはサウロの、神様に祈る姿に、人間の真実が取り戻された事が分かり、イエス様を同じ主と崇めているサウロに対して、最早敵ではなく、主にある兄弟として、兄弟サウルと呼び掛けて、サウロの癒しを祈ったのでした。 すると、忽ち目からウロコの様な物が落ち、サウロは元通り見える様になったのでした。 正しく神様の御業です。 サウロは身を起こして洗礼を受けました。教会の交わりに受け入れられたと言うことです。

19節には、

「**食事をして、元気を取り戻した**」

とあります。 新しい出発です。 サウロの回心は、紀元37年頃だと言われていますが、それから紀元 64 年頃にローマで殉教するまで、約 30 年に亘って、サウロ、ローマ名パウロは、心血注いで、命懸けの伝道を、小アジアからヨーロッパへ、そしてローマに至るまで、主イエス・キリストの福音を宣べ伝えると共に、イエス・キリストの**福音**を**神学的に体系づけ**、**多くの書簡**を記して、**教会の信仰を確立**しました。 キリスト教の世界への進展は、パウロ無しには成し得なかったと言われています。

彼は自分の身に起きた、不思議について、ガラテアの信徒への手紙1章15節で、

「**わたしを母の体内にあるときから、選び分け、恵によって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた**」

と言っています。 迫害者サウロさえ、福音の器に選ばれた、イエス様の愛はどんな反対者の上にも注がれています。 隣人の救いの為に、諦めること無く、祈り続ける事が、誰にでも出来る努めです。 わたし達はパウロの様に、大きな働きは出来なくても、私達も主の御救いを受けている以上、福音宣教のために、主に選ばれた者です。 わたし達もその自覚をもって、聖霊の助けを求め、イエス・キリストを証ししつつ、隣人の救いに、力を尽くして参りましょう。

お祈りを致します。

恵深い天の父なる神様

迫害者サウロを選び、偉大な使徒とされた主は、また、私達をも選び、小さくあっても、福音の使者として下さった事を有難うございます。

救われたのは救うため、とあります。

どうか私達を、聖霊によって、主の証人と整えて下さい。 次の一人に御救いが伝わって行きますように、お助け下さい。

救い主イエス・キリストの

聖名によってお祈りを致します。

アーメン。